

生活の中でジェンダーの視点を学ぶ 例えば夫婦別姓を通して

ぬまざき いちろう
沼崎 一郎

妻が仕事上は旧姓を使い続けたいと言ったとき、私は少しも反対しなかった。しかし、「姓の使い分けは面倒だから、戸籍を別にしたい」とペーパー離婚を提案されたときは、「何もそこまで...」と抵抗した。妙な理屈もこねた。「戸籍制度は天皇制の中心で、だから天皇制こそが問題で、まずこの大きな問題を何とかしないと...」などなど。

そう言えば、昔も同じようなことを言っていた。デートの最中だったろうか。彼女が何か日本の女性差別について話し始めたとき、「そんなことより第三世界の貧困のほうが大きな問題だ」とか何とか。こういう男、自称「進歩派」に多くないだろうか？

私は、進歩派お得意の「大きな問題」論を持ち出して、ペーパー離婚を拒否しようとしていたのだ。しかし、実は薄々気づき始めていた。もしも戸籍と天皇制がつながっていて、天皇制が問題なのであれば、戸籍の筆頭者にしがみつくと私はミニ天皇ではないか。妻にとって問題なのは、遠くの皇居の天皇ではなく、隣に寝ているミニ天皇のほうではないか。「問題はオレ？」 そう気づいたとき、パーソナル・イズ・ポリティカル(個人的なものは政治的である)というフェミニズムのスローガンの意味を、私は初めて実感できた。何度かペーパー離婚再婚をしているが、すっかり慣れた(笑)。

恋人や夫婦は、一番小さな「実践コミュニティ」だと思う。パートナーとの関係を問い直すことが、ジェンダーの視点を学ぶ出発点になる。特に男にとっては、そうして初めてジェンダーの問題を自分自身の問題と感じられる。女にとっても、恋人や夫、息子を変えることこそ、最も重要な「実践」ではないだろうか。女が変わり、身近な男を変えていく。男が変われば、社会も変わる。そう信じてがんばりましょう！